

六 金錢道德の修養

人の心は何處までも慾です。慾を離れて人の心はないと云つてよい位です。惜しい欲しいが病みつきで、怒るのも慾であれば、愚痴るのも慾。疑ふのも慢るのも、結局は慾であります。慾の源は金錢です。金は彌陀ほど光ると云ふが、慾に目のない現代人には阿彌陀以上でせう。「鉦たゞき金がないから鉦たゞく金があるなら鉦はたゞかぬ」。「かゝる時さこそ金銀ほしからめ、金もたぬ身と思ひ知らずば」。「慾ふかき人の心と降る雪は、つもるにつけて道を忘るゝ」。

總じて金錢は、餘り大事に仕過ぎてても不可ねば、粗末にしすぎててもいかぬ。看よ、金のために汲々として居た猶太人は、國が滅びたでないか。さらばとて、金を不淨視して高潔氣取つた印度人も、國が滅びたでないか。いづれも其の中道を得なくてはならぬ。

假名づかひ清むと濁ると大違、刷毛に毛があり禿に毛がなし

どちらに片寄つてもならぬ。貧乏なら貧乏でよいから、希くは清らかにありたい。古人は清貧に甘んずると申されたが、借金して居て清貧は困る。さりとて、濁貧は固より落第です。家貧にして道貧ならず。清貧はさることながら、仰ぎ願はくは清富となりたい。道德的に金錢を得て、道德的に使用するのです。佛眼禪師の曰く「君子は財を惜む、之を用ふるに道あればなり」と。金蓄の方法に二種がある。一は働いて儲ける法。一は儲けて使はない法。併しながら、儲けるばかりが能でもなければ、使はぬばかりが效でもない。正しく儲けて正しく使ふのが一番だ。ベーコン曰く

惡魔より來る金は、疾驅して來り、神より來る金は、跛足して來る。

と。金錢獲得の方法に二種ありて、一時的なるは危険多く、永久的なるが

よい。

寛政の頃、静岡に黒鐵屋といふ金物屋があつた。仲々の金持である。そこへやつて来た一人の男、金儲の法が授けられたいと云ふ。翌朝來れとの事に行けば、裏の井戸端の底なし桶に水を汲めと命ぜられる。朝から晩まで、汗水流して汲んでもく、ザア／＼流れてしまつて、一向溜りツこなしだ。翌日また來いとの事に行けば、今度は底抜釣瓶で、桶に水を汲めといはれる。馬鹿々々しい、昨日のに懲々だとは思つたが、金儲の法が教へてほしさに、釣瓶繩とつてガラ／＼とんとやつては見たが、二滴か三滴しか汲めない。けれども一生懸命、丹精を凝らした結果は驚くべし。夕方には桶一杯滿々と水を汲み溜めた。「どうだい水は汲めたかい」と旦那の聲。「ハイ此通りでございます」。「オ、よく丹精した、それで金儲の法は解つたらう」。「まだ解りませぬ」。「解らぬか、其通り、儉約の底を入れて、一生懸命働いて少し宛蓄めるのさ」。瓢箪にも締縛がある、竹の筒にも節がなくてはならぬ。其の底とは自己の分限を知ることであります。

また之と好一對の話があります。同じく金蓄先生の處へ參つて、祕訣の傳授を懇願に及びました。先生早速承知して、先づ傳授料金十圓を出せとの命少し高値とは思つたが、眞に金が溜るならばと思ひかへして、即刻差出した。二階で祕密に傳授するとの事に、上れば、恰も器械體操の棒のやうに、天井から鐵の棒が横に吊下げてある。何の事はない、それに飛び付いてぶらさがれとの命令。何ツこれ位とぶら下つた。と同時に直下の板が取脱されて、見れば驚くべし。光芒陸離として水の滴るばかりの大劔が、五六本倒さまに樹てゝある。過つて落ちたが最後、芋ざしにされるは必定。男は肝を冷し、鳴き聲になつて、「御主人、惡戯をなさつてはいけません、私は金を溜める祕

術を習ひに來たのです、こんな危険な事をして貰ふために、十圓出したのではありませぬ。「イヤ／＼暫く御辛棒なされ、金を溜めると云ふは、中々危険なもので御座る、これからそろ／＼傳授を致すでござらう」と落付きはらつて、「サテ貴公の今握つてござる兩手の小指を、鐵の棒から離して御覽じろ」仕方がない。金が溜めたさ一心に、男は兩手の小指を鐵の棒から離す。「よろしい、次には兩手の紅差指を、その鐵の棒から御離し召され」。「先生モウこらへて下さい、漸々危険になりました」。「勿論危険ではござるが、離さなければ傳授は出來ませぬ」。致方がない、折角の事に習ひ損じてはならぬ。止むなく紅差指を離す。「さて愈金を蓄める祕術でござる、次の中指を兩方共棒から御離しあれ」ときた。最早離すに離されぬとは思ふものゝ、愈の祕傳とあるからは、命に差問へない限りと決心して、恐る／＼漸く中指を、二本とも鐵の棒から離した。もう此上離せない。男は兩手の拇指と人差指とで圓く金の棒を握りつめて、こゝを命と一心にとツついて居る。「その人差指を御離しあれ」。「もう離されませぬ、先生一生懸命ですよ」。「左様、離されませぬか、其の通り、圓い金を握つたら、離さぬやうに召され、これが金を蓄める祕傳極術でござる、解りましたか」。

男は卸して貰ひ、厚く禮を述べて歸りました。實際、金が手に這入つたら無闇に離してはなりません。併しあまり執着するのも考へ物です。宜しくその中を得たいもの。